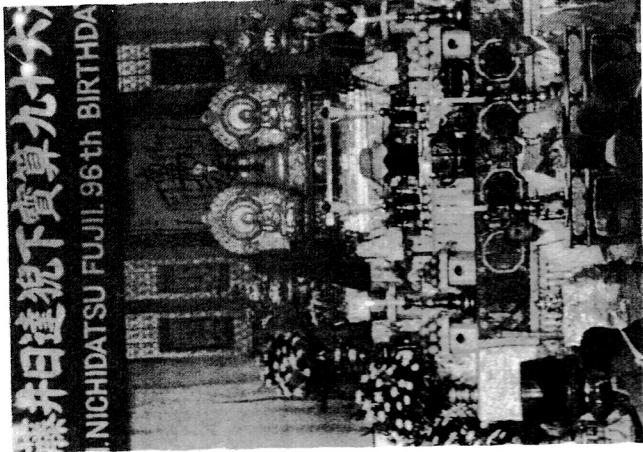


人間も猿も鳥も仲よく暮せる世界

#39-1

対談 藤井日達
ビル・ワピツバ



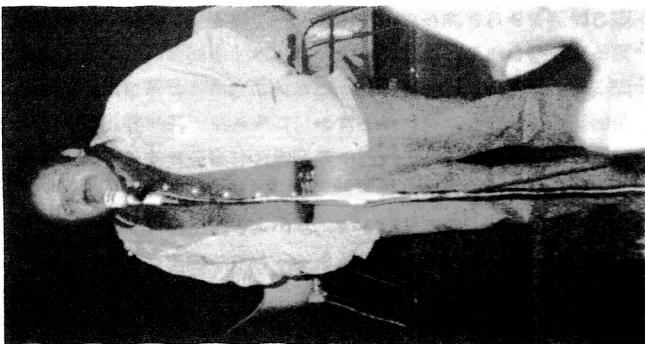
ビル 御師匠様、清澄山はとても静かで美しい所ですね。御師匠様のおそばでは、いつも平和な心でいることができます。

御師匠様 ここにけさ、お猿が一団体やつて来まして、お勤めをしておるところに、本堂の脇の木に登つて、大分と遊んでおりました。お猿さんもここのお祈りが好きなようあります。このお山は深くて、五〇匹ばかりのお猿がおるという。日本猿ですね。

お猿さんの愉快な話を鎌倉にあります。日蓮聖人のご草庵が鎌倉にありましたから、信仰の違う人たちがそのご草庵を襲撃する計画を立てました。夜中に火をつけて出てくるところを叩き殺そうといふ。けれども、その計画の日の夕方、お猿が来て、日蓮聖人のお袖を引いて山の上に登つた。そうすると間もなくご草庵が焼かれたんですね。いまはそこにお守りができます。

ビル とてもいいお話です。

御師匠様 何をかもみ人間と共にして、安樂な喜びの世界を作ついくようです。それを料簡違いにして殺し合うものですから、互



いに考えが一致せずに別れていかねばならない。恐れたり憎んだりね。これが動物と人間どちらまだよいですけれども、人間同士憎み合ふと、今日の核競争が起ころんですね。ものの考え方の違いで互いに殺し合う。互いに生きていく道を著ればよいけれども、互いに殺す道を考えている。これが現代の無宗教の行き詰まり。

お猿も人間も鳥も、みんな仲よく互いに生かし合つて生きていくことを教えたものは、宗教の生活。現代文明では殺し合うことが発達してしまったんですけども、人がこれから生きていこうとすれば、宗教的な人生觀に帰らねばならない。すると山も川も、それから蛇もお猿もみんな仲間になる。憎まない。お互いに助け合うものになる。

ユダヤの神様、キリスト教、それからマホメット教の神様が天地や人間を作つたという。そこまではわかりますけれども、作った人間が悪いことをしますと、神様は悪の力が地上に充満したと後悔し

て、これを滅ぼことにした。よい者を一組づつ生かしておいて、あと全部を滅ぼす計画をした。これがノアの洪水というものだと聖書に書いてあります。

どうぞが悪い者を滅ぼすというこの考え方、やはり悪い者に利用される悪い者とは誰か。悪い者を滅ぼすよりも、これをよい者に変えるために、基督教といいうものは世の中に残された。仏教という仏様も、その教えを継ぐお坊様も世の中に出てくる。そうでものを殺すなどいう教えを弘めていった。

これが仏法。仏法は殺生を禁じまして、魚や家畜までもお祭のときを持ち寄つて逃すことをしました。放生会という。生きものを放すということ。解放することですね。そんな教えがお祭の中に組まれております。私もアメリカに渡つてインディアンの人びと接しますと、インディアンの人びとから、神様のお力がものの生命をみんな滅ぼしてしまうというような話を聞いたことがない。やっぱり、ものの生命を助けていかねばならないと教えている。そこに共通点が見出されるようあります。

ビル 御師匠様のご本を読ませていただきましたが、その中で「立正安國」という言葉が出てきます。これはどういう意味でしょうか。

御師匠様 我々が生活していく上には、平和の生活が求められます。平和の生活をどうして作るかという問題が起ります。その平和の世界を作ることを「安國」といいます。「立正」ということは、根本は物質という問題ではなくて正しい眞理、といえば形がないようですが、聖人の正しい教えを第一にたてていくこと。それでなければ平和の世界というものはできてこない。

それで、たとえをとつてみると立正の問題は心の問題。心の問題が根本になっている。安國といふのは、それに伴う一つの影みたいなもの。本体は立正。それが形をとつて現れたものを「安國」といひき。立正を抜かして平和な世界を作ろうとしたのが、現代の唯物論の世界。そこには精神的な正しい教えがないからどこも行き詰まつております。唯物論で作った革命の中国とソビエト、それから最近のベトナム、みな根本の指導原理が仏法でなくて安國ばかりめざしてきた唯物論の、食べ物がなくてはいけない話。

日本が戦争で破れて、そして再び新しい国家をたてるというときに、私は仏教を再び日本におこさねばならないと考え、それがためにお仏舎利塔を建てました。これは非常なたくさんの方々がいるのですけれども、何も持たない今まで計画しました。政府はいまもって一円も補助したことはありません。県知事をつて、めつたに出てきたことはありません。けれども国民の心の中によらやく仏教が復興しました。お仏舎利塔を日本国に五〇も建てています。これは世界を統一する平和の象徴であります。アジアは元来仏教国でありますから、アジア民族はみな喜んでこれに参ります。

ビル もう一つ伺いたいのですが、日蓮聖人様がこの清澄山から逐われたということを聞きました。どうしてそういうことになつたのでしょうか。

御師匠様 それは南無妙法蓮華経を唱え出されたから。その南無妙法蓮華経を唱え出したことは、あれもよしこれもよいという意味で唱え出したのでなくて、日本に渡った仏教全体の批判もした。批判も極端でした。八宗十宗あつたんすけれども、その中の最も流行しておつた念佛は、南無阿弥陀仏を唱えると死んでから西方の極

楽世界に生まれると教えている。そうすれば仏教は大体お釈迦様の教えのはず。それがお釈迦様を捨てて、よその仏様に生まれていくことになる。これから先の方はお淨土でなくて、お釈迦様に背いた科で地獄に行く。これが「念佛無間」という法門。

それから禅宗。近ごろも鎌倉あたりにあるんですけれども、ときどき海外にも禅を弘めに出る者があります。これがまたお経もあり拜ます、問題はわが心の問題だから、心静かにおさめていけば何もお経なんか読まなくてもいい、そう教える。それが本当にわが心の光を見出せばいいけれども、どんなことが本当の道かだれもわからん先にわかつたような顔をする。そこが天魔。「禪天魔」という。

次が真言宗。これは弘法大師、高野山の宗旨。もっぱら、ご祈禱というものをする。真言で祈ればどんなことでもかなう。子どもがほしければ子どもができる。お金が性しければお金ができる。それから位がほしければ位が得られる。こういうことでみんなに勧めた。そこで一番に宮中で用いられた。皇位を継ぐことも真言のご祈禱でかなうという。それから皇子、男の子ができるようにお祈りする。そんなことばかり教えておつた。

それで日本の皇室が南北朝に分かれたのもみな真言の教えを信じていたため。皇位を奪うために戦が内輪に起こつた。真言はお釈迦様のほかに、お釈迦様より偉い仏様が別にいなさると教えた。いなさるかもしれないけれども、お釈迦様の仏法の中でお釈迦様を下げて、別の仏様なんか教える。これがやがて国を滅ぼす宗教をということで「真言亡国」という。

それから「律國賊」という。律は戒律。戒律を保つておれば、お坊様は渡世ができる。それでみんな意図者がお坊様になって、何もせん

で、お寺の中でじつと暮らしている。これは百姓のお米を食いつぶすイナゴ。律國賊といふ。国の危険、人類の苦難といふものをよそに、自分で戒律を保つておる。壁から先に飯を食べないと、そんなことばかり言うておる。これで、そんなふうに仏法を考えると、仏法がイナゴになつてしまふ。

念佛無間、禪天魔、真言亡国、律國賊、それだけならまだよいけれど、そのほかのいっさいの諸宗を、仏道を得る道でない、諸宗無得道、墮地獄の根源として、そんな教えを信すと地獄におちるといつて呼ばれた。それでは日本の仏法、一つも助かるものはない。それで南無妙法蓮華経と唱えなさいと、みんなに勧められた。新しい仏教であると。正しい指導者はお釈迦様以上のものはない。そのお釈迦様の教えの一一番大切なを見出して、今日の苦しみの衆生を救わねばならない。それが宗教者の役目だと……。

そんなことをいうのですから、こいつはけしからん、悪口を言つたと、この山を追い出されました。宗教者はいつも最も正しいものをもつて動いていかねばならない。それを保つために布施になるもの、まちがつたものに対しては、妥協をせず明らかに批判をせねばならん。それで、この山を逐われるのみならず、一代の間、島流しやら焼き打ちやらそんなことばかりに出あつて、安福の日はなかつた。

ビル 私が日本で仏法の教えを受けて、いろいろ考えたことを、御師匠様に聞いていただきたいのですが……。

いままで、すべての生命の中で、人間、動物、もちろん生きものの中で、自然に反しを生き方を始めたのは人間だけであります。鳥はいまでも円い巣を作つて、自分たちの道を歩いていますし、水

もその聖なる仕事をしています。川にあるときも雲にあるときも、海にあるときも、人間の体の中にあるときも、霧となっているときもそれぞれ自然のままに与えられた仕事をいまでもしていますし、私たちの叔母である月もあらゆる女性の体を通して、いろいろな働きをしています。太陽も驚くべき、やはり与えられたままの生き方を、いまでも変わらず続けています。

このようにして、あらゆる生命が継続した生き方をしているにもかかわらず、人間だけが生命を破壊する方向へと、自然の法則からはずれきました。つまり貪欲と驕慢によって、自分に必要というより単にはしいからということで、あらゆるものを見廻し始めた。

これはここで一番初めて学んだことです、これが私の信仰を非常に強めてくれたと同時に、信仰だけではなく、実際そのとおりに修行して生きることをも力づけてくれたと思います。

先生ど、悪を善に変えるのが宗教というお話をありました、今までの私たちの運動、またアメリカの植民地主義を振り返つてみますと我々は教育制度から始まるあらゆる生活、そして宗教さえも人的なものを押しつけられてきました。キリスト教は、悪いことをしても神父、あるいは牧師に告白さればよいと教えますし、そこには資本主義とか植民地主義を支えるものがありました。私たちはその中で生きてきました。私たちも悪に染まつていきました。

しかし私たちは、聖なるパイプとスウェット・ロッジの修行によつて、悪は自分自身の中にあるということに気づき始めました。自分を変えていくことによつて、やがて大勢を變えていき、兄弟姉妹を助けることができ、そこから生命を尊ぶことができるようになるのではないかと氣づきました。

以前は、私たちは苦しみとか痛みがなくて悟りが開けるような方法を探していたようです。しかし知識とか真実を手に入れるためには、涙と痛みが必ず伴うのだということに気づきました。いままで苦しみを避けようとしていましたが、今後は困難の中で生きていくつて、困難に向かっていくことによって、次第に道はけわしくなくなっていくのではないかでしょうか。

やはり書ひは苦しみの中にあるようにも思いますし、真実だからこそ困難なのだということを、改めて考えました。

御師匠様 現代文明では、ものの生命を殺す考え方方が発達しました。これが現代文明の行き詰まり。ものを生かす文明を作らなければいけない。これは平和の宗教よりほか、そんなことを教えるもの、心を変える道を与えてくれるものはありません。

近く英國に宝塔が建ちます。英國はキリスト教国ですが、そのキリスト教は平和を作るどころでなく、現在新旧争いをしております。この姿を見て、平和の国家を作りたいというので、今度は国家的な規模をもって平和都市を二十何ヶ所作つてみました。その最後の仕上げにミルトン・ケインズという町を作りましたが、これは木を植えたり人工湖を作つただけではいけない、何か不足しているといふので、探し求めていました。

そして私がランカーに建てた仏舍利塔の落慶式に、その英國の開発公団の設計士が参りまして、みんなの信心する姿を見て、「これだ」というので、英國にお仏舍利塔を平和の祈願所として建てることになりました。世界的に落慶法要を勧めることになります。

その公団の設計士は大学の教授ですが、その人はいまビルさんの話したように、現代の科学的な人工的な都市生活から離れて、自然

の生活中に生きていかねばならんといふ考へで、それを考へるための会を組織しております。

ビル ミルトン・ケインズの落慶供養はもう間もなくですね。私もお手伝いできることがあるでしようか。

御師匠様 インディアンの人びとが英國の人と会うて、アメリカの移住民であるいまのアメリカ人の政策、インディアンに対する政策を改めさせねばいかんと思う。そのためには英國のご信者に話して、そういう組織をロンドンを作ることになっております。

ビル ピピといって、インディアンの住むテントがあります。二角形のテントです。そのピピをミルトン・ケインズの宝塔様の隣りに立てるど、とてもいいのではないかと思います。私は、かつての英國の植民地主義者たちが、まだアメリカにいるのだということを告げたいのです。

御師匠様 ミルトン・ケインズの落慶供養には、インディアンの人びとを招きましょう。そうして、いまのアメリカの政策が不都合であるということを、国外の、英國の世論としておこしたいと思うて、その計画を進めております。落慶供養には世界の宗教、仏教の代表がみな集まります。インディアンの状況が今まで世界に伝わつておませんから、今度ミルトン・ケインズでよく会合して、今後の方針をそこで作らねばならない。

ビル 私はあと数日で帰国しますが、再びミルトン・ケインズでお目にかかることがあります。どうもありがとうございました。

(八〇年六月一七日 清澄道場にて。文責：編集部)

(通訊：吉崎有美子)

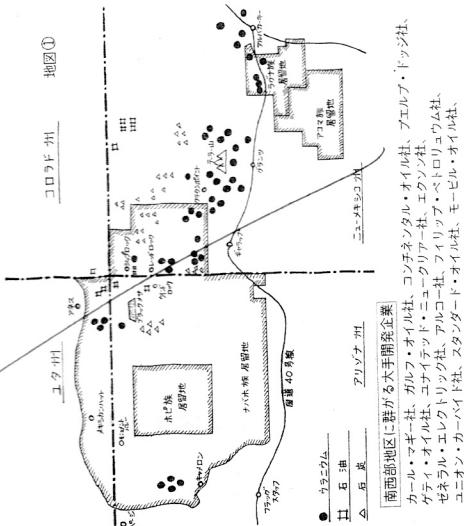
特集 立ち上がるアメリカ・インディアン②

母なる大地を踏みにじる 現代文明

編
集
部

はじめに

本誌ではすでに過去三年あまりにわたってアメリカ・インディアン問題を追求し続けてきました。一九七八年の“ザ・ロンゲスト・ウォーキー”を初め、テニス・パンクスやレオナルド・ベルティアの裁判闘争、また、シッククス・ネーション（六部族連合）を初めとする各部族の居留地で起こっている自治権問題とりわけ、南ダコタ州ラック・ヒルズのラコタ・スー族、アリゾナ、ニューメキシコ州



のナバホ、アパホ族の居留地を覆つていてるウラン鉱採掘による核開発汚染についてレポートし続けてきました。特に、核開発汚染の報告は多くの読者の方からの関心を集めました。そして、過日来日したビル・ワビッシュ氏が、各地でこの問題についての報告会を開き、現状を訴え続けたことがさらに多くの人ひとの関心を呼び、当編集部に全国の未知の方がだから“もっと詳しく報告して欲しい”という内容の手紙が数多く寄せられました。

「インディアンは常に自然のあらゆるものに深い尊敬の気持ちを持ち続けてきました。決して破壊的で目的のために自然を使ったり、コントロールしたり、探つたりはしませんでした。ウラニウムの採掘は健全に生きようとする生きとし生ける者たちへの辱めです。ウラニウムは母なる大地の中に残されるべきものです。アメリカはそれを必要としません。インディアンは、自分たちが歩む大地を決して売つたりはしないのです。」（クレジット：ホーリス）